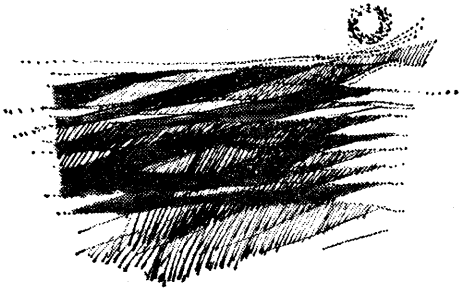


近代短歌に現われた子ども (十一)



大塚 雅彦

(22) 今井邦子

今井邦子は本名くにあ、明治二十三年、父の任地であった徳島で生まれた。父山田邦彦は彼女の出生直前まで、徳島県学務課長兼師範学校々長であった。父の転任等により、父の郷里長野県下諏訪町の祖父母に預けられて育つ。明治四十二年七月(二十才)文学に志して家出上京、詩人河井醉者を頼り、更に詩人の横瀬夜雨を頼って世話になったが、連れ戻される。翌年一月再び家出上京し自活。中央新聞社家庭部の記者となる。ここで同社政治部記者の今井健彦を知り結婚。夫は後に代議士となり参与官、政務次官等を歴任、彼女は政治家の妻として、また歌人としても知られてから、女流名士として社交界に活躍し、文壇や国

文学界にも交遊広く、才色兼備をうたわれてはなやかな時期を持った。若い頃はロマンスめいたこともかなり伝えられ、例えば横瀬夜雨との間に恋愛感情に近いものを持った（『文庫』派詩人の酔茗や夜雨との関係については横瀬隆雄『横瀬夜雨』〈昭41・7〉や、酔茗夫人島本久恵女史の長篇小説『長流』の第5部〈昭36・12〉等に詳しい）り、更には、詩人の三木露風や水野葉舟とかなり親しい交遊を見せたりした。また彼女は気性の烈しい激情的なところがあり、作家水野仙子と共同生活をしたり、結婚後も夫や子を棄てて家出をし、京都の一燈園で奉仕生活をする等、心の赴くままの自我本位の行動も少なくなかったようである。昭和二十年郷里に疎開、二十三年七月、心臓麻痺で急逝、五十九才であった。彼女と親しく、東京から馳せつけて只一人その通夜をした国文学者の故塩田良平博士は「黒髪は艶々として床の上からこぼれ、五十九才とは思えぬほど一筋の皺もなく若々しい顔だった。大げさに云えば、紫の上の最後もかくやと思われるばかり輝いていた」（東京新聞、昭47・7・15

夕刊）と、その最後のさまを伝えている。

彼女は幼少より文学を愛し、少女時代に河井酔茗主幹の文芸誌「女子文壇」等に詩歌を投稿し、才を認められた。大正五年「アララギ」に入会し、島木赤彦に師事した。昭和十一年、女流のみの短歌雑誌「明日香」を創刊、主宰し師の歌風を継承した（同誌は邦子没後、姪の岩波香代子が主宰、更に現在は川合千鶴子が代表で続刊されている）。歌集は『姿見日記』（散文も収録、大正1）、『片々』（大4）、『光を慕ひつつ』（大5）、『紫草』（昭6）、『明日香路』（昭13）、『こぼれ梅』（昭23）等がある。『今井邦子短歌全集』（昭45・6）も出ている。また、万葉集・源氏物語・枕草子・樋口一葉等についての研究評論や、随筆等の著書も少なくない。その歌風は、初期の頃はかなり情緒の揺れが烈しいが、吉屋信子は、「初期の作品はなにもにも囚われぬ自由奔放な、しかも抒情溢れる新鮮な感覚だった」（吉屋、前掲『ある女人像』）と述べ、むしろ「アララギ」に移ってからの作品をあまり買ってないようである。じじつ、「アララギ」

入会後の作品は写生風で手堅いが、いまひとつ個性に乏しいうらみがあると思われる。

私が興深く思うのは、邦子が娘時代に二度、家庭を持つてからも前述の如く一度、家出というような非常手段をとっていることである。そういえば同じく信州出身の作家平林たい子も、娘時代に家出をして連れ戻されたりしている。この頃、女性で文学で身を立てようなどとすれば、このような反逆的で強烈な方法によるしかなかった。後年、邦子自身が「現在の時代は娘さんが音楽、絵画、文学等で身を立てるにしても、親のよき理解による幸福な援助を受けられるようになられたのも、明治時代の私たちが茨の道を血と涙で開いたからです。そして女が一人で自活するということに対して、世間の男性の無理解さを凌いでここまで来たと思う時、一つの目標を持つ女の強さということを感じるので」と書いていることには実感がこもっており、近代女性史の或る一面を示してくれるのではあるまいか。

①ほろほろと吾子が笛吹く此の母を淋しがらせに笛を

吹きしく

②暗き家淋しき母を持てる児がかぶりし青き夏帽子はも

③故知らずもゆる怒りの怒るままに怒られてある吾子のあはれさ

④病室のこの縁に来て吾子がつく手毬の音に心はなごむ

⑤おほかたの子を持てる人も吾が如く間なく時なくなげきはるか

⑥青年の四肢たくましくふるはせて己れ歎かふ吾が子を見た

①と②は歌集『片々』所収。邦子は明治四十四年六月に結婚し、翌年四月に長女節子を生んだ。しかし、彼女は妻や母としての自己の生活に満足しきれずに、やはり文学の世界に憧れる気持が強く、しかも、新聞社の政治部長の夫はむしろ世俗的で、そんな妻の心情に必ずしも理解を示さず、夫妻の仲は時に険悪化し、幼い娘もそうした父母の確執を見て育ったようである。①と②の歌に

いずれも「淋し」という語が用いられ、②に「暗き家」などと歎く言葉があるのも、そうした家庭の零屈気を伝えるものである。物言はで十日すぎたる此の男女……という表現で夫との仲を描いた歌がこの頃の作にあり、「児が泣けば母も泣きたき此の家の淋しき軒をめぐれる蚊柱」という作品もある。そうした父母の間において幼い子どもが示す相を、①はその子が笛を吹く動作、②はかぶった夏帽子によって描いている。①は全体が主観の強い表現だが、②の方は下句の客観的表現が印象を鮮明にしている、争う父母の間にある子どもの哀れさが、却ってにじんできくるようである。

③は歌集『光を慕ひつつ』所収。ここにも、はげしい気性の母親に叱られている子どもの姿がうたわれている。むろん「叱られて手をつく吾子が姿よりいとしきものはあらざらなく」という作が此の「悲しき母」という題の一連の中にあるように、叱られる対象の吾が子にすまないという思いは常にあるのに、わけもなく叱ってしまうという反省もあるのだが、それでも吾子をいたわ

れないという自虐の気持であろう。作者の自己像を暗示しているともいえるが、一方、文芸に身を燃やそうという母親を持った子どもの悲哀が描出されているとでもいうべきか……。

④は歌集『紫草』所収。「病苦」という題の一連の中にある。大正七年作。この作品になると、いかにも親和した母子像という風に変っている。邦子は「大正六年に急性リユーマチスを病み、右足不自由となり、「半生の運命をかへた」(『今井邦子短歌全集』年譜)。そういう状態のまま病院に入り、長男幸彦を生んだが、その後も足の療養を続けたようであり、この歌は、七才くらいになっていた長女節子が病床のかたわらの縁で手毬をついてくれたわけで、後年の「宵しぐれしめやかにして物親し凝りたる肩を子に揉ませをり」(大正15年作)などの歌にも通うものがあり、なごやかな内容である。

⑤は歌集『紫草』所収。「我が子」一連の中にある。大正八年作だが、この年は長男が病弱のため海辺の義姉の家に預けたり、長女が疑似ジフテリアとなったり、邦

子も困窮した。そのような背景を知って読むとよくわかる。歌人の故北見志保子は「忙しい日常の生活にあつて、常に小さい時のお子さんが心にかかっている。まことに母親の心というものは、間なく時なくなげいて、子供のことにかまけるものであろう。今井さんは子供にまけて自分の仕事の遅れることと一緒に嘆いたのである。世の母親を代弁している歌である」（『近代短歌講座』第3巻「近代短歌とその鑑賞」昭25・12）と、さすがに同性らしいゆき届いた鑑賞をしている。

⑥は歌集『明日香路』の末尾の方にある「青年期」と題する一連にあり、「男の子^こ汝れ^な青年期来るたくまじきなやみを見つつ母はもだしぬ」「この日頃言葉すくなき子にとへば心^{こころ}にふりて物を言わなり」「発育よき四肢ふるはしてみづからを歎き言ふはや母によりつつ」等と共に、よく知られた作品である。これらの歌は昭和十年作であるから長男幸彦は十七才になっているわけで、邦子は長女を嫁がせ、自らは四十代後半期にあった。日毎に身体が遅しくなり青年期に入ってくる長男が、若者らし

い青春の悩みを歎くのを、息つき深く見守る母親の心情がみごとに詠出されていて、私には忘れられない一首である。

(23) 若山喜志子

若山喜志子は本名は喜志、明治二十一年、長野県東筑摩郡広丘村（現塩尻市）の旧家、太田家に生まれた。歌人王国といわれる信州には女流も輩出しているが、そのうち、夫婦で歌人であったいわゆる比翼歌人には、この喜志子や久保田不二子（島木赤彦の妻）や四賀光子（太田水穂の妻）等がある。喜志子は明治四十四年上京して郷土の先輩である太田水穂方に寄寓し、その紹介で若山牧水と識り、翌四十五年同人と結婚し、二男二女を生んだ。文筆一筋の牧水をたすけて貧しさに堪え、内助の功を發揮した。昭和三年、夫と死別、その後しばらく夫に代って歌誌「創作」を主宰した（この雑誌は現在も令息若山旅人氏の主宰で続いている）。戦災で地方に疎開、戦後は東京都立川市に長男旅人氏一家と住み、昭和四十三

年八月没した。享年八十才。なお、彼女の妹桐子（ペンネーム潮みどり）は慧星の如く歌壇に現われ、わずか卅一才で死去したが、一時「創作」を主宰した歌人の故長谷川銀作の妻である。

喜志子は小学校補修科の頃より詩歌を愛好、「女子文壇」に詩を投稿し横瀬夜雨に愛され、投稿仲間の今井邦子や生田花世とも相識した。また、「信濃毎日新聞」の歌壇に歌を投稿し、太田水穂に認められた。牧水と結婚後はその影響のもとに「創作」に作品を発表した。歌集に『無花果』（大正4）、『白梅集』（牧水と合著、大正6）、『筑摩野』（昭5）、『芽ぶき柳』（昭26）、『眺望』（昭36）等がある。『若山喜志子全歌集』（昭56）も出ている。彼女の歌風は「平明な表現のなかに抒情味の強い性格があり、牧水との貧しい生活、死別後の苦しい生活の記録的性格も濃く出ている。また、女性らしいすどい感受性をもって詠まれている」（『和歌文学大辞典』安田章生担当、昭37・11）といわれる通りであろう。

①わが全身の血をさながらに波うたせ浴びる如し子

は乳を吸ふ

②赤い入日赤い入日ときりげなく背の子ゆすぶるかへる草原

③子等の遊ぶを遠くききつつ松原の草に足なげうら安きかな

①は歌集『無花果』所収で、「白き大路に落葉せりき」一連の中にある。母親の全身の血をまるで波うたせて浴びるようだ、と子の乳を吸う動作を描いているのは、まことにユニークで活き活きしている。同じ歌集にある「児に乳をふくまする時ふとも来てあとかたもなくきえゆく愁うれひ」が授乳時の感傷の明滅をうたっているのと比較すると、面白い。

②も同書の「郊外の入日」一連所収だが、一、二句が童謡調であり、後の方の「わびしさに」一連の中にある「あそびはぐれ一人し吾子は泣いてくる甘薯畑かんしょばたけの一すぢみちを」がやはり何となくメルヘン調なのと似ている。

③は歌集『筑摩野』所収で、「秋草は言ふ」一連の中にある。楽しそうに遊ぶ子等の声を遠くの方にききつつ

自足している母親の安息が詠まれている。

(24) 久保田不二子

久保田不二子は本名ふじの。明治十九年、長野県下諏訪町に生まれた。島木赤彦（久保田俊彦）の妻であった姉うたが早く没したので、明治三十五年赤彦と結婚してその後妻となり、三男二女をあげた。彼女もまた赤彦をたすけて内助の功大きく、殊に大正十五年（彼女は四十才）赤彦に死別後は、苦勞して多くの子女を育てた。昭和四十年十二月脳溢血にて逝去、七十九才。夫赤彦の墓の傍らに葬られた。

彼女は明治四十四年「アララギ」に入り、翌年より同誌に作品を発表し続けた。歌風は「一貫して質実且つ素純」（『近代短歌辞典』〈昭62・2〉、鹿児島寿蔵担当）といわれ、平明、地味で手堅い作品を示した。歌集に『苔桃』（昭7）、『庭雀』（昭27）、『手織衣』（昭36）、遺歌集『松の家』（昭41）等がある。なお、岩波文庫版『島木赤彦歌集』（斎藤茂吉と共編、昭11・11）や鎌倉書房版

『島木赤彦歌集』（昭22・9）等の編著もある。

① 三つになる小さき子なれど聞きわけてさむき床べに
一人いねにけり

② これの世にかなしと思ふ児どもらの命護りつつ年を
経にけり

③ 春雨に服を濡らして帰り来し子を伴ひて家のなかに
入る

④ 月よみの光さし射る炉の端のまどは楽し子も帰り
来て

①は「アララギ」明治四十五年一月号所収、「信濃の歌」という欄にある。「三つになる……子」というのは、明治四十二年生まれの三女みをあたりであろうか？ 可憐な子どもの姿態が眼に見えるような歌である。不二子の作品の「アララギ」に始めて出た一連である。土屋文明氏は「久保田不二子夫人の思出」という文章（不二子の歌集『松の家』巻末所収）の中で「アララギに久保田不二子夫人の歌が載った時、左千夫先生が、これは久保田君（大塚註——島木赤彦のこと）よりうまいと言わ

れたのを記憶する。勿論軽い気持ちでの発言であったに違ひないが、夫人の作を高く評価したことは間違ひないと述べている。

②は歌集『苔桃』所収。「病む児」一連中の歌。一連の中に「耳を病む幼な児もりて絵本よみこの日暮れけり外は時雨^{ときぐれ}て」等があり、病む子を看護しつつ、多くの子供たちの命を護りながら経て来た歳月を思いかえした歌だろう。「かなし」は「愛^{かた}し」であろう。

③同じく『苔桃』所収。「子供」という題の中の一首。昭和二年作でこの歌の後に「陸奥^{むつ}の果てより吾子の帰り来て物語る春の夜は更けにけり」という作があるのを見ると、仙台あたりに遊学していた息子（三男周介か？）が春休みにでもなって帰郷した折の作か。久しぶりに帰省した息子を迎えて嬉しい親ごころがうたわれている。結句の字余りが気持のゆとりを象徴するかのようにな、おちついた情調を醸し出していて、気分よい歌である。

この頃の作者は夫に死なれて、子供たちがそれぞれ他郷に勉学に行って居り、一人ぐらしをしていたためか、そ

れらの子供たちが帰ってくるのを唯一の楽しみにしていたらしいことは、やはり昭和二年作の「遠き国に学ぶ吾子らがかへりくる夏の休は近づきにけり」等でもわかる。④は昭和四年作、「眞夏」一連中の作で、まさにその子供が帰省した際の家族団欒の夜の楽しさを詠じたもので、歌は素直すぎるほど単純な内容だが、短歌は何も文学性や芸術性ばかりをねらった作品や、奇を衒った作品ばかりが面白いのではなく、こういう日常的な主婦の感懐を率直に綴ったものにも捨てがたい味わいがあり、むしろそのようなものこそ短歌の王道であることを思うべきであろう。

*

*

*